
CLANNAD & DCSS

輝神大將軍獅龍凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLANNAD&DCSS

【Nコード】

N44730

【作者名】

輝神大將軍獅龍凰

【あらすじ】

クラナドとダカーポの小説、製作中に挫折。消すのも嫌だから…

…

朝倉純一は夕方遅くに外をぶらぶらしていた。

「早く帰らないとなあ……」

妹の音夢にどやされてしまう。

可愛い妹の為に早く帰らねばと、時計を確認して走り始める。

すると、以前から通っていた道にあるパン屋が気になり、立ち止まる。

「たまには買っていてやるか……」

土産というわけではないが、変わったものを食わせてやるのも悪くないだろう考えたのだ。

「こんばんは」

店内に入ってみると、誰もいない。香ばしいパンの匂いがする。店の人が出て来るのを、陳列してあるパンを眺めながら待つ。すると、見た事の無いパンが列ぶケースを見つけた。

「おせんべいパン……」

どういう訳だが、それをトレイの上に置きたくなった。そして、レジに向かおうとすると女性が出て来て笑顔で対応してくれた。いつの間に現れたのやら。

「いらっしゃいませ。」

随分な美人さんだが、年上かな？と考えていると、その女性は何故かとても嬉しそうな表情を見せ、上機嫌にいくつかパンをオマケでサービスしてくれた。

「ホントにこんなに頂いて宜しいんですか？」

星型のパンやシュークリームが入っている。

「ええ、またいらして下さいね。」

自らの幸運を喜ばしく思いながら、意気揚々と店を出た純一。店から数分と経たない距離に、小さな公園が見える。そこで一人の女子高生に出会う。

「あなたをお連れしましょうか？…この町の願いが叶う場所に…」

呆氣に取られ、純一は見つめることしか出来なかった。

岡崎朋也はいつもの通り目が覚めた。そこは自宅では無く、彼女の家。

「お早うございます」

今まで挨拶という習慣が無かった朋也にとって、気恥ずかしい感覚に襲われる一瞬だ。

「あらあ 岡崎さん。」

自分の彼女の母親。早苗さん。母親というより姉と言った方が良さそうな見た目に、時々クラッとしてしまいそうになる。

「おい小僧。朝っぱらから、人の嫁に何しようとしてやがる」

「朝の挨拶意外に何をするように見えたんだ？」

自分の彼女の父親。タバコを吸いながらパン屋の開店準備をしていた。

どうにも相性が悪いのか、それとも良いのか、顔を見るたび漫才をしてしまう。

「さっさと支度済ませちまえ。渚が待つてんだからよ」

了解、とだけ言い残して茶の間に向かう。その足取りは軽い。その理由は明白だ。

「あ…朋也くん。お早うございます」

自分の彼女である、古河渚だ。先程から自分の彼女だと強調しているのは、朋也自身にとって自慢の彼女だからだ。

「ああ、お早う。」

用意してもらった食事をゆっくり味わい、余裕をもって学校へ向かう。この古河家に居候するようになってから、規則的な生活を送れるようになった。最近は遅刻もない。

「行ってきます、お父さん。」

「行ってくるな、オッサン」

朋也と渚が学校へ向かう。早苗さんに挨拶出来なかったのは、朋也達が食事中に町内を徘徊しに行ったからだ。

「おう、かましてこい！」

このやり取りが未だに意味不明だ。何をかませばいいのやら。そういえば気になる事が一つある、早苗さんだ。

昨日の夜に渚から聞いた話だが、閉店時に早苗さんのパンが無かったらしい。もしや棄てたか？悟ってしまったのだろう、自らが造るパンの味に。昨日は様子がおかしかったし。

「渚は早苗さんのパンの事、どう思っているんだ？」

朋也の質問に渚は、苦笑いしながら答えた。

「独創的で凄いと思います」

きつぱりと否定的にならのが彼女らしい。どうとでも受ける事の出来る返し方だ。

「朋也くん…その質問は…あれ？」

齒切れの悪い様子を見て、朋也は渚の視線の先を見た。

「待ってくれよ、音夢！」

「もう知らない！何もしてないのにあんな…罰ゲームみたいなパンを買ってきて！」

目の前を通り過ぎるカップルを、げんなりしながら見つめる朋也。まさかとは思うが、早苗さんのパンではなかるうか？そんな気持ちになり、渚に視線を送る。

「なんだか…少し気になってしまいます。」

心配そうに上目使いで、こちらを見つめるのは反則だ。正直まだ、直視出来ない場合がある。

「まあ…早苗さんのパンだって決まった訳じゃないだろう？ただ、どうしても気になるっていうなら…後で聞いてみるとしよう。」

「そうですね。じゃあ後でにしましょう。」

その日の休み時間。朋也と渚は、昼食の事で話をしていた。

「よう、岡崎と渚ちゃん」

ヘタレの春原が馴れ馴れしく声をかけて来た。と、聞こえるように言う。

「相変わらず酷い扱いッスね」

春原は直ぐに話題をかえる。

「放課後、部室行く前に智代の所いくぞ」

それだけ伝えて春原はぶらりと去る。

「もしかして春原さん…智代さんの事好きなんですか？」

想像してみたら噎せる朋也。何を言い出すのだろうか、この天然さんは。しかし、こつも頻繁に下級生の校舎に顔を出す春原も、正直どうなのだろうと気になるのは確かだ。

「実はな渚…」

面白いからそういう事にしておこう。

「にははは〜お兄ちゃ〜ん」

教員免許を持っているにも関わらず、芳野さくらは制服を着て学校に来ていた。

「だから…何でそう自由に出入り出来るんだよ？」

さくらは転校して海外で大学を卒業。それでも学校に来ているのを気にしてしまう純一。

「特別待遇だも〜ん。いずれは学園長にだってなつてやるんだから」

何だか怖い感じになり、一言言って説き伏せてやろうとすると、純一の体にさくらは抱き着いて来た。

「ん…充電充電」

暫くほつとくと、ゆっくり体を離す。

「充電…完了」

どうやらこれをしないと調子が出ないとか。やはり周りからの視線が気になる。

「相変わらず見せ付けてくれるなあ、朝倉よ」

振り向くと杉並がいた。杉並は購買で買った食事を片手にしていた。

「先程、朝倉妹に会ったぞ。伝言を預かっている」

「伝言？」

二人が会話するのは食堂が近い廊下。人の出入りが激しく、壁に背を預けて話をする。

「中庭に来てほしいそうだ。弁当を二つ持っていた状況からして、二人で食事をしたいのだろう」

何と言うことだ。昨日のオヤツ代わりにと、パンを買ってから喧嘩していたのに、弁当を準備していたとは。健気な妹よ。最近では手作り料理にも手が出せるようになって来ていたから、期待していだろう。

ふと、さくらの方を気にする。

「ボクは遠慮して屋上に行くよ。二人のランチを邪魔しちゃ悪いしね」

さくらは手を振りながら去って行った。

「なあ朝倉よ。そろそろ聞きたい所だが…」

杉並お決まりの、顎に手を当てるポーズで質問してくる。

「一ヶ月前、アイシアが島を離れる前だが…やはりあの件は芳野嬢とお前が鍵を握っていたのか？」

あの件。俺の周りの人間の記憶がリセットされた事。アイシアの魔法と、願いが叶う枯れない桜の木が原因だった事件。
しかし、あの時をきっかけに音夢との仲は、以前より深くなり妹という意識が薄れ恋人としての親密度が高まった。

「…多分な。いいんじゃないかそんなのは…」

そう、過去の事よりも気にしなくてはいけないことがある。
忌ま忌ましくも、再び咲き誇る島中の桜の木だ。

「…スマンな。不粹な質問をした。そういえばこんな話を耳にした事があるか？」

話題を切り替えてくれるのはいいが、音夢が待っているのを知っているだろうに。

胸元からメモ帳を取り出す杉並。

「木彫り製の星の彫刻を配り歩く、下級生の幽霊が出るという噂だ」

実はこの噂、純一も耳にした事があった。

「クラスの奴が話していたな…結構有名な怪談話なんだろう？」

「ああ、実際に工藤も…これを受けたとの事だ」

何処からか出した、星形の彫刻にゾツとした純一。

「な…お前…」

「物的証拠が出ている以上、噂話では済まない状況だ」

あまり関わらない方がいいと感じて、よそ見。

「さ、さて音夢の所いって飯済ませるかなあ〜つと」

わざとらしく去る純一をみて、杉並は溜息。

「やれやれ…協力者が欲しかったのだが」

古河渚は、いつも通り昼食にパンを買った。岡崎朋也のクラスが移動教室で終るのが遅かったため、自力で買えるあんパンのみである。

「ぶひい」

いつもの場所で彼氏を待つ間に、目の前をウリボウのボタンが通り過ぎた。

「あ…あつちに行く人と人が多いから…」

急に立ち上がったら、立ちくらみが渚を襲う。

「あ…」

倒れそうになると、誰かが手を貸してくれた。白衣が確認できたから、先生かと思う渚。

「大丈夫ですか？」

大きな黄色いリボン、首に着けた鈴。見間違えの様の無い、今朝の女性。

「は…ハイ…」

朝倉音夢が手を貸した女子生徒は、あまり顔色が良くないように見えた。

「あの…少し保健室で休みましょうか？」

手を貸すとゆっくり立ち上がる生徒。

「いえ…大丈夫です。すみません、ご迷惑を…」

なんて珍しい程に律義な人なんだろうと、関心して見ていると後から誰かが走ってくる足音。

「渚！どうした、大丈夫か？」

きっと彼氏なのだろう。兄さんもあんな風に私を心配して駆け付けてくれるのだろうか？などと考えていて、ふと考えた。

大丈夫と言っているし、彼氏さんに任せて場所を譲るべきでは？

「あまり無理をしないで下さいね。何かあったら保健室で……」

「あの……」

何か聞いたそうに女生徒が近づく。しかし、タイミングが悪いのか良いのか、兄さんが声をかけて来た。

「悪い、杉並に捕まって遅くなった。あれ？」

兄さんはベンチに座った二人の内、女生徒に声をかけた。

「昨日公園にいた……」

しばらくキョトンとして見ていた彼女は、口を開く。

「あ……朋也くん、この人です。」

「何が？」

彼氏はチラリと兄さんに視線を送る。

「えっと……公園で演劇の練習をしていたら、電柱の影に隠れて見ていた人です。」

……は？としか言葉が出ずに、一瞬空気が凍り付いたのを感じた。

「だから一人で遅くに出るなと言ったろう?」

ゆっくり立ち上がる彼氏。

「ごめんなさいです…でも創立者祭が終わっても忘れたくない劇でしたから……朋也くん?」

臨戦体勢という構えが私にでもよく分かった。無言で立ち上がって兄さんの前に。

「ちょ…ちよつと待て!」

兄さんが後退りして少しホツとする。強気に出て最悪な状況になつて欲しくない。相手も見たところ不良のようだし。

「あんたの彼女がやってた芝居に見覚えあつたから…」

私は解らない。芝居?。

「学園祭の時の…覚えていてくれたんですか?」

女生徒がどこか嬉しそうに聞いて来た。

「そりゃあ衝撃的だったから。いきなり一般客が入って来て、夢を叶えろ、だなんて格好いい台詞叫んだらさ」

今度は恥ずかしそうにする女生徒。見ていて飽きない反応が初々しい。

「演劇そのものの感想を聞けると嬉しいな」

彼氏は敵意を引つ込めて普通に兄さんと話始めた。というか学園祭の時は、街に帰って来ていなかった私は置いてけぼりですか？

「見入った劇だったけど…どこかで聞いたことある話なんだよなあ」

「本当か？ いったいどんなタイトルか解るか？」

題名が解らない劇をしていた事が、今更ながら可笑しく思えた。

「いや…タイトルまでは解らないんだ。でも昔、芳野の婆ちゃんに聞いたことがあって…」

本人も思い出せそうで思い出せない。そんな表情をしていて悩んでいるのが解る。

「別に無理に聞きたいわけではありませんから…思い出せなければいいです。それよりその…」

渚は勇気を出して聞くとうとしていた。やはり今朝の二人の会話が気になっていたのだろう。

「えっと…」

今度はどう聞いていいのか悩み始めた。手に取るように考えが読める。それだけ表情がころころ変わる。これが渚と一緒にいて飽きない点の一つだ。

（フォローしてやるか…）

ポンと渚の頭に手を置いた俺。

「俺、3 - Dの岡崎朋也。こいつ3 - Bの古河渚な。」

少し長話になりそうだ。お互いの名前くらい教え合っていた方が、何かといいだろう。

そう思い、取りあえず自己紹介から入った。
すると、彼氏の方が先に。

「あ、ああ。3 - Aの朝倉純一。それと」

今度は白衣の女性。

「保健医の研修生で朝倉音夢です。よろしく願いしますねっ。岡崎さんと古河さん」

笑顔で反され、ふと気付く。

「もしかして…兄妹か何か？」

全然似てない二人を見てたら、普通は恋人だとか想像する。そして、俺と渚は阿保の子のように目を丸くして見る。

「ん、まあ……一応な。」

純一が歯切れ悪く答えると、どこか照れ笑いする様子を見せた音夢。

「えっと……今朝聞こえてしまったのですが……」

渚はぎこちない口調で今朝の事を話し、自らの家がパン屋だという事を説明した。

「間違いないよな……あの公園の近くのだろ？」

苦笑い気味の純一。

「ハイです。それでその……謝りたくて」

母親の作ったパンが、二人の喧嘩原因になった。いくらご近所さんでは暗黙の了解を得ていても、こうした現実を目の当たりにした渚は、少々ながらシヨックだったのではなかるうか？朋也はこんな事を考えていた。

「いや、別に改まって謝られる程でも……なあ？」

純一は音夢に同意を求める。

「そうですね。それに、私も行ってみたいです。どついう店か気になるますし。」

純一はほんの一瞬だけ顔を引き攣らせた。無理も無い。第一印象が早苗さんのパンな訳だし。

それから数分、パンの味とか中身について少し話してから、劇の話などを少しした。

チャイムが鳴り、それぞれが弁当やパンのゴミを片付ける。

朋也は思う。さっき朝倉音夢が言ったのは社交辞令だ。きっと二人とは深く関わる事はないだろう。今日たまたま話が出来て、後は何も用がないはずだと。

人と人との繋がりがなんて、浅ければ直ぐに繋がっていた事すら忘れられていくモノなのだから。

「スマン。早速再会しちまったな」

朋也は春原と共に六時限目をサボり、保健室に来た。数学の授業が嫌だったのもある。宮沢が資料室でお客様と話し込んでいて入れないのもある。だが一番に重要な事。

「岡崎いゝもしかしてこの子？昼に会ったっていうのは」

金髪の、正直関わりたくないタイプの男子生徒が近寄って来た。

「まあ、確かに。僕の求める大人しい感じで、言うこと聞きそうな人ではあるけど……」

それは本人を目の前にして口にしていい台詞でしょうか？と音夢は考える。

「まあ、サボる場所に可愛い子がいる。これをまた一つクリアされて増えるのはいい事だよな？」

音夢にスイッチが入る。ここでナメられてしまえば保健室は不良のたまり場に成り兼ねない。

有無を言わず職員室に連絡を入れた二人。音夢一人なら何とかやり過ごせると践んでいたのだが、冷酷に、かつ簡単に他の教師を呼ばれて保健室から逃げ出す羽目になる。

「仕方ない。とりあえず図書室だ。ことみがいれば開いてるはずだ。」

朋也と春原は教師に見つからないように廊下を歩く。

「もう少し話が解る人に見えたんだが……気のせいだったみたいだ」

あの朝倉音夢は年齢が一つ下でありながら、自分達一般生徒とは違い教師側の立場にいる。そう易々と甘やかす訳にもいかないのだろう。

「なあ岡崎。」

唐突に春原が聞いて来た。

「何か今、僕達の上てる事ってギャルゲーの主人公みたいじゃね？」

知らん。とりあえず女の子がいる場所でサボるために頑張っているのは、周りから見たら恥ずかしい奴なんだろうが。ついでに春原が主人公のゲームなんぞ有り得んからな。春原アフターってか？

ガラガラ

図書室の扉を開くと、古紙の匂いが漂っていた。

一ノ瀬ことみはいるかと確認しようとすると、テーブルにバイオリンが置いてあるのに気付く。隠さなくては危険だ等と考えた途端に、視界に入る金髪。

春原ではない。春原のような汚い金髪ではなく、綺麗に摩くツイントールの金髪だ。少女は行儀悪く机に腰掛け、小難しい本を読んでいる。

「この学校の子じゃないね……」

ああ、と春原に相槌する。彼女は二人に気付かず本に集中している。声をかける前に、この場所の主にあいさすだ。

「ことみ」

反応が無い。

「はあ……ことみちゃん」

少し驚いたように、ことみが顔を上げる。

「あ、朋也くん。こんにちはなの。」

あれ？僕は？と悲しげに春原が驚くのを無視して。

「あの子、桜の木の資料を捜しに来たらしいの。」

相変わらず会話のリズムがおかしいのな。

「朋也くん、枯れない桜の木のお話は知ってる？」

知ってるも何も、街の一般常識じゃないか。何でも願い事が叶うとかで、恋愛成就、安産祈願、合格祈願なんかで訪れる旅行者は多い。魔法なんじゃないかって噂もあったが、全て迷信。そう考えているのが殆どだ。

「あの子は、その桜を枯らせようとしているの」

何だって？思わず岡崎と春原は少女に視線を戻した。

「そっぴゃあ、あの桜って本来は一年中咲いてるよね。枯れたら街中の桜も全滅なんですよ？」

春原にしては記憶力がいいようだ。確か暫く前も一時的に、一斉に枯れたとニュースになった。

「ホントに目茶苦茶だよな。咲いたり枯れたり気まぐれで。」

「気まぐれで咲いた訳じゃないよ」

岡崎と春原と一ノ瀬が視線を送る先、先程の金髪ツインテール少女だ。

「これは警告。きっと悪い事が起こるんだよ。皆が桜の力に頼りすぎたから。」

彼女の言葉に岡崎が苦虫を噛んだような顔をして言う。

「だから枯らすのか？」

「そう。二度と咲かないやり方でね」

彼女は本を片付けて図書室を出た。

「何だったんだろうね今の子。」

不思議な感じはあったよな。

「でも、あの子ともお友達になりたいの。」

ことみはいつの間にか回収したバイオリンを片手に、岡崎と春原を見た。それは殺意でしょうか？

図書室から移動し、結局校庭で時間を潰した春原と岡崎。
チャイムと同時に春原の方へ飛来物が。

俺は慣れた動作で巻き添えを喰らわないように身を翻し、春原兼
簡易シールドを構えた。

「ひげぶうつ！」

こめかみに漢和辞典が突き刺さる。相変わらずナイスコントロールだなあと関心してみると、いつもながらのニーソックス姿の女が走って来た。背後にはその妹を連れ立って。

「こおーらあつ！アンタ達また授業サボったわね！」

「春原が俺を連れ出して無理矢理ニイ！！」

「アンタ友達売るのに躊躇無さ過ぎですねっ！」

「春原君……あまり岡崎君を連れ出さないで下さい。」

「あの……もしかして全部ボクが悪い事になってる？」

「「「今更……」」」

三体一で虐めるのは良しとして、先程の図書室での事を話す。やはり気になるのは桜の木の伝説。自分達は人並みにしか知識は無いが、藤林妹なら多少なり知っているはずだ。

朋也はやけに気になったのだ。先程の金髪少女の台詞が。

「枯れない桜の木のお話ですか？」

「ああ、ホラ最近また咲き始めたし」

朋也は妹へ尋ねた。

「そうですね……あまりいい噂は聞きませんよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4473o/>

CLANNAD & DCSS

2010年10月22日18時28分発行